忘れじ わが海軍の思い出

郷　芳美

郷里の小学校に集った、村民総出の盛大な送別会場で、海軍に徴兵された六名を代表して、緊張興奮、祖国の為に、精いっぱい、粉骨砕身、一意専心、軍務に精励し、ご期待に副うべく、必ず全力を盡くして、頑張りますと、悲壮な決意で、大群衆に誓い、嵐のような声援に送られて、一寒村郷里の駅を出発したのであった。六十九年前の当時を想い起こすと、種々の事象が浮かび、感無量となる。

当日、鹿児島市を出発した、佐世保市相浦海兵団に入団する徴兵は、何千名であったのだろうか。長蛇の軍用列車が、北薩摩の中心地、川内駅に到着したのである。近隣町村の群集で、駅前の広場は満杯、各町村毎に日章旗を振り歓呼する民衆に囲まれて、軍歌で志気を高めた徴兵らは、軍歌を止めると一斉に両親、親戚らに別れを告げて、列車に乗りこんでいったのであった。たくさんの父母達は、一眼わが子を見んと、線路上を行ったり、来たりして探し合い、入団者は親は何処に居るかを求めて、車窓より身を乗り出して、父母を呼び合った真剣な往時の風景は、平和な今の時代にも私には髣髴として、去来し、眼に焼きついていて、決して脳裏を去るものではない。蘇る。

愈々出発。昭和十九年五月十四日　忘れもしない午後十一時〇五分であった。長蛇の軍用列車は動き出し、途中で乗車してきた師範の学友Y君と同席、熊本、久留米、鳥柄等を通過、各駅の歓声に送られて、翌朝目的の相浦駅へ到着したのであった。

すると、「相浦海兵団に入団するものは、みんな降りろー」と、今まで社会では聞いたこともない、ドスの効いた気合のこもった図太い声に驚いて、「ほら、愈々始まったぞ」と、学友と眼を見張ったものである。

昭和十九年五月十五日付で、入団した我ら二百余名の師範学校出身者は、十一教班に配分された分隊で、師徴分隊と言われて、我らはその四期生であった。

軍服に着替え、起床、釣り床訓練、水泳、軍事教練と、三か月の訓練を終え、真

夏の某日、父母が面会に来るとの知らせがあり、私は学友のA君とH君の二人を連れて、団門脇の面会所に向かったのである。

風紀取締り等厳しい門衛が見張る中で、数家族が門衛に隠れるようにして、食事をして居り、わが母上も持参した日傘で、三人を隠まって、芝生の上に拡げたぼた餅や、おにぎり、西瓜等を、それ早くたくさん食べよと、催促して、こそこそと食べていたが、ありがたいことには、門衛は知らん振りして、暗黙の内に、我らの食事を許可していてくれたのであった。その頃砂糖は統制で、普通の家庭では困っていたが、わが家は父上が蜜蜂を飼っていたので、たっぷりと甘いぼた餅ができて、たらふく食べ終えたのであった。学友二人はたいへん喜んで、両親に御礼を言い、辞する時、「郷君は元気で大丈夫だから、心配しないでくださいね」と、言った言葉が今も耳に残っている。

隊に帰った夕方のことである。母が持たせた余分の三個のぼた餅を食べる適当な場所がなくて、困った三人が話し合って、ここが一番良いと決めた所は、何といつも我らが掃除をしていて、きれいな水洗便所であった。上官等に気兼ねして食べた、最高安全な隠密行動であったのである。あの蜂蜜の効いたぼた餅の味と、三人の笑顔が忘れられない。

十九年九月まで、約三か月余の訓練を終えて、愈々乗艦である。何という軍艦かと、興味津々、心待ちにしていたある日、防空壕掘りをしていた時、急に全員集合、四列横隊に並べられ、番号を掛けて、五番までは軍艦何々、次十番までは軍艦何々と決められて、希望を言えば変更されたが、半強制的に、それぞれ乗艦を命ぜられて、その時点で各自の運命は決まったようなものであった。

その時であった。私の傍に居た学友のA君が、「おいも、わいといっしょに葛城に乗ろかいね」と、言った言葉が今も頭から消えない。混雑していたあの時で、瞬間的に即刻決断しなければならなかったことで、A君は後の軍艦を所望したのであった。何故、「おいと乗いが」と言わなかったのかと、悔やまれてならない。終戦になったが、学友は帰還しなかった。本籍等いろいろ消息を探したが、行方は判らなかったのである。

空母葛城に乗艦、第二分隊の三連装機銃分隊に配属されて、呉湾で艦装中であったが、十月十五日に竣工、進水して、真冬に向かう呉湾や瀬戸内海の洋上で、熾烈極まりない超酷寒の硬鉄板上で、実戦に備えての昼夜を分かたぬ、黎明訓練、午前

の訓練、午後の整備作業、夕食後の夜間訓練が続き、月々火水木金々の明け暮れであった。

常時我ら上水は、三日に一泊の外泊が許可されていて、呉市に上陸すると、我ら腹ぺこの下級兵は、飲食店が立ち並ぶ、呉街道を左へ右へと、小皿に盛った「おからに、にらをまぶした」、安物を求めて、十軒位食いあさり、満腹すると、広大な呉海軍集会所の寝床にもぐりこみ、眠るのが、唯一の楽しみであった。

起床のベルが鳴り、帰艦すべく、波止場へ行ってみて、たいへんびっくりし、驚いたことを想い出す。多分南海の戦地からであろうか、今帰りついたばかりのような軍人が、独りでランチから、降りて来たのである。帽子も軍服も身に着けず、頭から足先まで、真っ白い包帯でぐるぐる巻きにした、真っ白い人間が、白い腕で軍刀を腰に着け、堂々と闊歩して降りてきた偉丈夫、私は驚いた。両眼だけ開けた痛ましく貴い姿は、壮烈であり、祖国の為に、南海の洋上で挺身して、戦い傷ついて呉海軍病院へ帰ってきた、生き証人と見た。その後、病癒えて、元気になっただろうかと、今も想起しては、感動し、独りで讃え、感謝している。

海軍には、〇〇五分前という言葉が使われていて、「洗濯物取り入れ」の時の五分前は、特に思い出が深い。いつもその時は、干していた靴下が、何足かなくなり、衣服検査の時に、上官にしぼられるので、五分前になると、早く干した靴下群の下に来て、不足の分を取り戻すべく虎視眈々として狙い、「取り入れ」の号令に、素早くとりもどし、急いで平然として、引き揚げたものだった。

昭和二十年四月頃になって、大和も沈み、戦局は不利に傾いて、わが空母葛城も、二回出撃を指示され、重大決意をしたが、攻めより守りに転じ、出撃も中止となって、要員を残して、我らも陸上勤務となり、我らが三十数名の兵を引率して、横浜へ向い、神奈川県庁の隣りの、元生糸検査所跡の「横浜船舶警戒総司令部」へ転属を命ぜられ、私は履歴書係として、過ごすことになり、ここは商船乗組の兵を訓育する所で、比較的に勤務は楽な配置であった。

しかし、戦に飢えは付きもので、ここも腹ぺこは変らず、ある日朝食の時である。二十名位の配膳が終って、食事しようとしたときである。何か咽元に違和感を憶えたので、ぺっと吐き出したところ、何と二匹の回虫が両手に出てきたのである。他に気付かれないように洗面所へ行って、処理したのであるが、腸の中の回虫君も食料に不足して、「人間様、何かおくれよ」と、催促したのであった。

相変わらず空腹は続き、三日に一度の外泊の時は、よく戦友と田舎に食を求めて出かけた。我ら兵には、当時「ほまれ」という、配給の煙草があって、農家は畑で作っている大豆を持っていて、何時の間にか、仲よしになり、お互いに不足する分を補う、物々交換をして、助け合い、喜んでいたものである。

教育は、いつの世にも、偉大な力を発揮するものであるが、間違った方向に向かうと、甚大な損害を蒙るものである。昔習った蒙古襲来の嵐が神風であったと教えられ、当時の国民は、軍国教育で、一部の為政者に依って、完全に洗脳され、神がかりの戦争遂行に走り、何時か吹く筈であった神風も吹かず、次第に物量を誇る本土空襲が厳しさを増して、全国へ拡がっていったのであった。

五月十日であったか、横浜は大空襲となり、焼夷弾を市の廻りに落下させ、中央を攻撃して、市内は大火災となり、日本の家は木と紙でできているので、被害が大きく、わが司令部も屋上のガラスを突き破って、室内に落ちてきたので、オシタップを持って消火し、中でも弾火薬庫が危険であったが、難を逃れて良かった。市内の被害は甚大で、山下公園は夥しい様相を呈し多数の死体や負傷者が溢れ、集められ、横たわり、横須賀軍医学校の生徒が装行車で駆けつけ、多数の看護婦がきて、診療、治療を行ない、たいへん悲惨な状況であった。

やがて八月十五日終戦となったが、下士官らは殺気立って、負けたのは上層部であると言って、酒をあほり、徹底抗戦すると息まき、騒然とした日夜が続き、最高幹部らが、大切な時期だから、冷静にせよと、両手を拡げてなだめすかして廻り、たいへん危険な状況であった。ところが、暫らくすると、近くの山下公園の旅館に、マッカーサー元帥が、来て入居するとのことで、速く兵を帰郷させたほうが良いということになったのであろう。我ら兵は、急に、毛布一枚、緊急食料二日分位、確か七十七円ではなかったかと思うが、現金を支給し、一階級宛昇進させて、近くの桜木町駅から、昼食兼行、あわただしく、全国へ向けて、くもの子を散らすように、帰郷させ、私も九月一日に帰郷したのであった。

忘れじわが八か月の海軍生活は、良かったこと、良くなかった日、折り混ぜて、私は、正しく中国の寓話（人間万事、塞翁が馬）であったと、確信している。往時を偲んで、この秋十月の卒寿を越えゆかんと、静かに歩を進めている毎日である。